

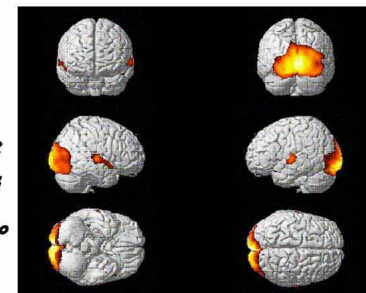
一体何が？ 画像に対する病的反応を起こす人と起こさない人を分けたのか？

東北大学加齢医学研究所



バーチャルリアリティなどの視聴覚刺激に対する生体の病的反応の危険性について研究を進めるには、生体の反応を多角的に評価するシステムの確立が肝要であり、多次元評価システムが加齢医学研究所付属病院に設置されたので、研究が飛躍的に進歩した。特に末梢血管抵抗リアルタイム解析システムは研究の一環として開発された世界でも初めてのものである。

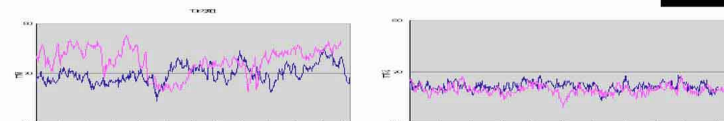
高次脳神経機能に着目してポジトロンCTなどを駆使して脳神経中枢の活動変化について三次元神経解剖学的構造から研究すると同時に、近赤外線モニタリングデバイスなどを駆使して組織酸素代謝時系列の情報量の変化を解き明かすことにより、脳神経機能の複雑性の変動を介して研究を進めている。



個々人の心理特性・体質に併せた視聴覚コンテンツの安全な楽しみ方がある。

安全の基準作りには、心理スケーリングと生体自律神経機能評価、最先端脳神経科学等を駆使した更なる研究が不可欠である。e-Japanのようなデジタル社会では、健康に関する配慮がますます必要となる。

A型行動パターンでは些細なストレスがかかっても、交感神経がすぐ活発化して、動脈硬化を促進することが知られている。加齢医学研究所に置ける研究では、タイプA行動パターンにおいて、脂質代謝異常を認めており、高次脳神経機能特性と代謝の関連性を考える上で興味深い結果と思われる。



脳組織内酸素代謝におけるVR反応は心理傾向によって異なる

ジョセフソンやブッシュマンは、性格的に高い攻撃性を保持する対象者の方が、メディアにおける暴力映像が攻撃的な行動を促進しやすい傾向にあることを実験的に証明している。マルチメディア社会に置ける重要な知見として特筆される。

